世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Significance of Literature and of American Literature in Liberal Arts Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 美穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/846

教養教育における「文学」「アメリカ文学」の意義

原田　美穂

1.　はじめに

筆者はこれまで武蔵野大学や他の複数の大学において、英語スキルを磨く科目（特定のコンテンツを英語で学ぶ Content-based の科目含む）、また英語でアメリカ文学を読む英文学科目を教えてきた（前者が圧倒的に多い）。近年において、英語の実践的能力の必要性に対する認識は高まっている一方、文学部や英文科といった存在が全国的に少なくなっており（国文科も同様だろう）、大学教育においても、学生が社会に出たときにすぐに現場で役に立つ、いわゆる「実践的な知識やスキル」といったものを習得させることを求められ、大学側もそのニーズに呼応する形で授業や各種取り組みを実践する動きが目立ってきている。そのような流れの中で、筆者は 2016 年度、武蔵野大学の全学共通教育プログラム「武蔵野 BASIS」[1] の中の学部学科横断型教養教育授業「基礎セルフディベロップメント」（必修科目）の中の一分野「世界文学」を担当することとなった（2017 年度も継続）。この科目において学生は、様々な学部学科の学生が入り混じったクラスの中で、7 つの学問分野をそれぞれ 2 コマ（3 時間）× 3 週間、計 6 コマ（9 時間）の授業で学ぶ。もちろん各学問分野を 3 週間で網羅することは不可能であるから、各学問の内容を深く学ぶというよりは、未知の学問分野に触れることで知的好奇心を刺激し、幅広い教養の素地を養い、同時にディスカッションやプレゼンテーションといったアカデミックスキルの基本を学ぶものである。各分野では担当教員の専門・興味分野を扱う裁量が認められており、筆者はアメリカ文学作品、中でも女性やマイノリティといったテーマのものを扱うことにした。しかしアメリカ文学を教えられる機会に喜びを感じると同時に、ある種の疑問や不安が湧いてきた。これまで概ね英語を学びたい集団に教えることがほとんどであったため、想定される学生像、また科目の位置付けについても未知な部分が多かったからである。そもそも教養科目で何をゴールにすればよいのかという疑問から始まり（筆者自身は教養教育の必要性を多いに感じていたが、学生側としては教養科目に意義や魅力を感じているのか、という疑問があった）、その中で文学の果たす役割は何か、また全学科の必修科目であるため文学に必ずしも興味があるわけではないと想像される集団に文学の面白さや意義を感じさせられるだろうか、といったことだった。また、これまで英語を教えてきた学部の科目とは異なり、全学科共通科目であり、英語習得を目的とした授業でもないため、英文学（特に小説などの長文）を原書で読むというのは現実的でなく、主に日本語の翻訳で読ませることになるだろうが、翻訳版で原文の訴えるものや魅力がうまく伝わるだろうか、さらにはもっと根本的な問題、「世界文学」とは何か、またその括りの中でアメリカ文学が果たせる意義は何かといったものだった。しかし同科目を昨年 2016 年度、そして 2017 年度と担当してきて、学生との関わりや彼らからのフィードバックによって、私が抱いていた疑問の多くは解消された。その中には「成果」や

「科目の意義」と確信をもって呼べるものも多くあったので、今後自分自身が文学・アメリカ文学という科目、また「教養教育としての文学」と向き合っていくためにも、この機会に振り返り、学生の成果実感から「教養教育としての文学の意義」をまとめることにした。

2. 教養教育（の目的）とは

2.1. 大学教育に求められるものとは

変化の激しいグローバル社会、その影響を多分に受ける日本社会の中で、いま大学に求められることとは何だろうか。それは大学で教える者としてすでに自問していたことであるが、教養教育の一部を担当することになり、この問いがより緊急性をもって感じられた。

筆者はこれまで、大学以外にも英語学校などの民間会社においてビジネスパーソンなどの社会人に英語を教えてきた。そういったセッティングでは、英語を「仕事に役立つ、あるいは仕事に必要不可欠なスキル」、英語を通して英語圏文化・慣習について学ぶことを「仕事を円滑にするための知識習得」として捉えていた。たとえば、来月または近い将来海外に出張・赴任する人のための「英語コミュニケーションクラス」、ビジネスで求められる英語基礎力を測る資格試験に対応する「TOEIC 対策講座」といったクラスを担当してきた。近年は企業だけでなく大学でも、学生が卒業して社会に出たときに即戦力となるような能力の養成を求められているようである。大学のカリキュラムにおいても、TOEIC をはじめとする英語資格試験を意識した授業、スピーキングやリスニングを中心としたコミュニケーション能力を高めるための授業などが増えていると感じる。

社会で即戦力となるために必要な実践的スキルの獲得に重点が置かれる一方、スキルだけは不十分だという声もある。つまり、「学力やスキルだけでなく、基本的なコミュニケーション力や想像力、創造力、実行力など、人としてのベースとなる能力や広い視野、柔軟性といったものがないと、せっかく持っている能力は発揮できず、周りの人とうまくやっていくことができないため社会では通用しない」という意見だ。経済産業省は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を「社会人基礎力」[2] と定義づけ、それを構成する 3 つの力として「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」と 12 の能力要素を挙げている。さらには、「基礎学力」「専門知識」「社会人基礎力」に「人間性、基本的な生活習慣」を加えたものを「能力の全体像」[3] として提示している。平成 26 年に発表された「平成 25 年度産業経済研究委託事業『社会人基礎力育成の好事例の普及に関する調査』報告書」[4] の中で、社会人基礎力育成の好事例の普及に関する検討委員会委員長の花田光世氏（慶応大学総合政策学部教授）は「これからの大学教育が、学生それぞれの特性に見合った『学生自身の主体的な気づき』をきめ細やかに促す機能を強化していくこと。また、それぞれの大学の原点となる特性と整合性を保ちながら、真に教育効果の高い社会人基礎力の育成プログラムへと進化すること。こうした教育が大学教育の日常に深く定着していくこと」が重要だと述べている。

大学教育に直接関わる文部科学省は、「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」(2012) [5] の中で、「このような時代にあって、若

者や学生の『生涯学び続け、どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力』を育成することが、大学教育の直面する大きな目標となる。」と宣言している。人生において出会う様々な問題はほとんどが「答えのない問題」であり、「正解」が何年、何十年後にわかる場合もあるが、たいていの場合は「何をもって正解とするか」、その判断基準さえ各々に委ねられている。また、「教育課程企画特別部会　論点整理」(2015)[6]の中で、「育成すべき資質・能力」として、「何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能)」「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びに向かう力、人間性等)」を「三つの柱」として挙げている。

2.2.　教養教育にできること

経済産業省が示した「能力の全体像」のうち、専門分野の授業が「基礎学力」や「専門知識」を養うものだとしたら、教養教育はそれ以外の部分、つまり「社会人基礎力」や「人間性」を育むことに寄与するところが大きいといえるのではないだろうか（もちろん専門分野の教育と教養教育で得られるものは重なるところもあり、必ずしも二項対立するものではないが)。

また文部科学省が提案する「育成すべき資質・能力」の中の「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか（学びに向かう力、人間性等)」といった能力の育成においても教養教育が担うことができる部分があるのではないだろうか。前者については専門科目やゼミなどで培う部分も大きいだろうが、教養教育によって、「知らない世界の存在を知り、それに向き合い思考することで普段慣れ親しんだ思考・パターン化された論理からいったん離れ、深い思考の世界に入り、自分の内面にも向き合う」「いくつもの分野に触れることで、一見関係なさそうなことが実は繋がっているということに気づき、個別の知識を有機的に結びつけてより総合的な判断力や新たな価値観・視点を獲得する」ことに繋がるのではないだろうか。

もちろん教養教育と一口に言っても、扱う内容とやり方次第でまったく違う結果を生む。教員のみが話す講義形式の授業と、学生に積極参加を促すアクティブ・ラーニングに焦点を置いた授業では学びという活動の性質が大きく異なり、得られる能力や学生の成果実感にも違いが出てくるだろう。筆者が担当した教養教育科目では、講義形式とグループワーク（アクティブ・ラーニングにあたるといえるだろう）の両方の形式をミックスさせることが授業運営の基本方針として示されていたため、従来的な、講義のみの教養教育授業とは違い、学生により主体的な学習行動を促すことが可能であった。「講義」の部分においても、学生に問いかけ、マイクを持って意見を発表させるなど、聞いているだけではない授業スタイルを心がけ、学生に「表現する機会」「他の学生の意見を聞く機会」をなるべく多く与えることで、自己表現する楽しさに目覚め、慣れてもらうようにした。「自分の意見を発表する」という前提があれば必然的に能動的な思考モードにスイッチが入り、授業やそのテーマに対する当事者意識が出てくるのではないかと考えた。

教員として、また個人としての経験を踏まえて言えることは、やはり狭い世界しか知らな

いと、傲慢になったり考え方が極端になったりすることがあるということである。「すぐに目に見えて役立つもの」にばかりフォーカスすると、寛容さが失われ、周りに悪影響を及ぼすだけでなく、最終的には本人も苦しむことになる可能性が高い。価値観が多様化する現代において、視野が狭ければ新しい価値を生み出しにくくなり、より良い商品やサービス開発の妨げにもなるだろう。つまり、仕事においても個人としても、本人にとっても周りにとってもマイナスなのである。

3. その中での文学とは

3.1. 教養教育における文学

教養教育の意義はあるとして、その中で文学をやる意義とは何であろうか、というのが次の疑問だった。教養教育は専門分野の教育と違い、「目に見える形ですぐに役立つスキル修得」などとは趣が異なるため、「目の前に広がる新しい世界に興味を持ってもらう」ということがキーだと思うが、それがうまくできるのだろうか、という懸念があった。読書習慣のなさが指摘される今の時代において、おそらく文学にそれほど、または全く興味のない学生が大多数を占める集団に文学の面白さや意義を感じてもらえるか、それが一番大きな疑問だった。

3.2. 文学の中でもアメリカ文学（外国文学）

筆者が担当したのは 7 分野のうちの「世界文学」と冠された分野である。教養教育とはいえ、世の中のすべての学問分野を網羅することはできないため、各分野は比較的大きな範囲となっていた。例えば「社会学」にも様々な分野があるので、その中のどの側面を扱うかは担当教員の裁量に任されており、「世界文学」においても、世界の文学を体系的に扱うことを求められているわけではなく、フランス文学、イギリス文学（その中でもシェイクスピア）など、教員の専門分野や興味分野に焦点を当てることを認められていたため、筆者はアメリカ文学を扱うことにした（内容はのちのセクションで説明）。「世界文学」という学問を教えるというよりは、「世界に様々な文学がある中で、その一部に触れて学んでみる」という趣旨の授業と筆者は理解した。いつも学生に言うのだが、「見たことのない世界の扉を開けるので、のぞいてみませんか。興味があったらぜひ中へ入ってください。」といった感じである。しかし、文学そのものに対して学生がどれだけ興味を持っているか（いないか）という問題だけでなく、扱う作品の設定や作者のバックグラウンドが日本ではなく、彼らにとって馴染みのない外国を舞台とした文学に興味をもってもらえるだろうか、さらにはそれを日本語訳で読んでもらってうまく魅力が伝わるだろうかという不安もあった。

4. 授業実践方法

4.1. 授業の概要（時間、期間、クラスサイズ）

筆者が担当するプログラムは、学生は一つの学問分野を 3 週間（2 コマ × 3 回）で学び、

それを 7 分野繰り返し、最後の数週間でグループごとにテーマを決めてプレゼンをする、という構成である。担当教員は 3 週間ごとに違うクラスに移動し、同様の授業をする（当然各クラスの学生に合わせて調整し、様々な面で違いは出てくるのだが）。年間で、3 週間単位の授業を異なる学生を相手に 7 セット実施することになる。各クラスは 2016 年度は 60 名弱、2017 年度は 50 名弱で構成されている。

4.2.　授業内容（概略）

4.2.1.　最初の問い

初回授業の冒頭で、ウォームアップも兼ねて、「文学とは何か」「世界文学とは何か」ということについて 4、5 人で自由に話し合ってもらった。学生同士で話し合うことに慣れ、「意見を発表するのが当たり前」という空気を初めから作りたいという意図もあった。一つめの質問では、まず文学をどのようなものだと理解しているか、馴染みがあるのかないのか、二つめの質問では、これから学ぶ「世界文学」と名付けられた学問分野に対する学生のイメージや期待はどんなものかを知るためだった。筆者が驚いたのは、世界文学を日本文学とは対照的な、別のものと捉えている学生が多かったことである。

4.2.2.　英語詩“Caged Bird”

次に、詩人マヤ・アンジェロウ（1928–2014）の詩 “Caged Bird”[7] を読んだ。アンジェロウはアフリカ系アメリカ人女性で、詩以外にも自伝やエッセイ、戯曲などを書いており、俳優として舞台に立つこともあった。授業内容を計画し始めた段階では、扱う作品はすべて翻訳版を使おうと思っていたが、（学生にとっては幸か不幸か）たまたま筆者の担当クラスに当たったわけだから、英語で文学作品に触れてみるのはどうかと思い、英語で読むことにした。専攻はさまざまであっても、英語は全員少なくとも中学・高校で学んできたはずなので、まったく知らない言語というわけではない（留学生の中には高い英語レベルを持つ学生、日本語を勉強していたので英語はほとんどやってこなかったという学生とさまざまであるが、英語を見たことも聞いたこともないという学生はほぼいないと思われる）。「英語で詩を読む」という経験は彼らにとってそれだけで刺激的なのではないかと考えた。また、詩は散文以上に、音やリズムを味わうという面、またそのスタイル自体に作者の意図やメッセージが込められているという面もあるので、まず筆者が英語で詩を朗読するのを聞いてもらった。そのあとで言葉の意味をざっと訳した。この詩は “Caged Bird”（籠に捕らわれた鳥）というタイトルであるにもかかわらず、“A free bird”（自由な鳥）から始まり、以後 caged bird と free bird のくだりが繰り返されていく。意味を説明した段階で何人かの学生に感じたことを聞いたが、この段階では「自由な鳥と捕らわれた鳥の話」「捕らわれた鳥はつらそう」といった感想しか出てこないことが多かった。そのあとでこの詩の作者であるマヤ・アンジェロウの情報、特に幼少時代に起こった痛ましい出来事とその後の彼女の人生について触れ、さらに彼女の有名な自叙伝のタイトルが “I Know Why The Caged Bird Sings”（私は籠の中の鳥がなぜ歌うのか知っている）であることを伝えてから、今度はこの詩をどう解釈できるかグループで話し合ってもらった。その後各グループで出てきたことを発表しても

らい、最後に各自コメントを書いて提出してもらった。

4.2.3. 「青い眼がほしい」

初回の 2 コマ目からの残り 5 コマはトニ・モリスン（1931–）の長編小説『青い眼がほしい』（1970）[8] を使った活動にあてた。トニ・モリスンもマヤ・アンジェロウ同様、アフリカ系アメリカ人の女性作家で、ピューリッツァー賞や、アフリカ系アメリカ人女性としては初のノーベル文学賞も受賞しており、アメリカを代表する作家の一人である。このリンクは最初から構想していたことではないのだが、授業で取り上げる作品として様々な候補の中から最終的に選んだこの二作家、二作品は背景やテーマ性の上で共通する部分が多く、バラエティという面からは他の選択肢もあったかもしれないが、学生のコメントを見ると、結果としては、問題意識を呼び覚ますインパクトや、連続性という意味で良かったと思われる。

原書は英語で書かれているが、授業では日本語翻訳版を使った（日本語よりむしろ英語のほうが読みやすいという留学生には英語版[9] も渡した）。さすがに約 200 ページすべてを読むことはできないので、最初と中間と最後の各 30 ページ弱程度を読み、ディスカッションし、最終日の 2 コマでグループプレゼンをしてもらった。

初回の授業で 20 分ほど（各自読めるところまで）読み、わかったこと、疑問点、感じたことを周りの人とシェアし、各グループにマイクを持って行ってそれを発表してもらい、全体にシェアした。疑問点に対するフィードバックや読み進めるうえでのヒント、また人物名や物の名前など、文化的・時代的に彼らが知らないものについては、こちらから補足情報を与えたが、解釈に関する質問には直接答えず、再度読んだりさらに読み進めたりしながら考えるよう指導することもあった。小説の冒頭のセクションに関しては、子供が読むような短い文からなるパッセージが、2 度目は句読点無し、さらにはすべてひらがなといったように、形を変えて 3 度繰り返されるという非常に独特な表現方法を取っているため、オリジナルの英語バージョンではどういう表記になっているか（英語には 1 種類の文字しかないためどういう風に表現されているか）を想像させてからそのページだけ英語版も配った。

2 週目の授業までの宿題として、中間部分のテキストを最低 1 回は読んでくるよう伝えた。2 週目の授業の冒頭で、読んできたかのチェックと、内容を思い出し整理する目的で、あらすじを具体的に書いてもらった。そのあとでディスカッション→疑問点や気づきの全体共有→筆者の補足、といった要領で進め、後半の授業では最後の部分のテキストを配布した。読む前に、配布したセクションの前の部分で起こる、ストーリー上非常に重要な出来事を簡単に説明し、そのあとで 20 分程度テキストを読む時間を与えた。理想的には自分のペースで味わいながら読むとよいのかもしれないが、ひとつひとつこだわっているとおそらく全然読み進められない学生が出てくるため、「一度ですべて理解しようとしないでよいのでまずは読み進めるように」と指示した。その後、発表するグループに分かれ、ディスカッション、そして次回（最終週）のプレゼンのテーマ決めをしてもらった。プレゼン準備は授業中だけではとうてい時間が足りないので、授業後各自再度テキストを読み、グループメンバーとスケジュールを合わせて集まって準備をするように伝えた。完全分業制は禁止し、どの部分を誰が担当するかにかかわらず、発表内容はみんなで話し合って決めるよう指示した。また

LINE などのやりとりで終わらせるのではなく、同じキャンパスなので実際に会って話し合うように促した。グループによるが、概ね 1、2 回会って準備したようである。

プレゼンのグループは、1 グループ 4〜6 名で、1 クラスあたり 10 程度のグループができた。メンバーは全員違う学科になるよう配慮した。プレゼン時間は各グループ 5、6 分程度としたが、それより長くなるグループもあった。パワーポイントでスライドを作ることは不要とし（その制作に時間をかけてしまうので）、言葉でしっかり伝えることを重視した。ビジュアルエイドとして紙に図や絵を描いたものを見せる、また黒板を使うなどは OK だが、使わなくても構わないと伝えた。原稿（メモ）を前に持ってきてもよいが、ただ原稿を読んでいるだけではオーディエンスに伝えることはできないので、しっかりとした姿勢で堂々と立つ、前を向く、ふらふらしない、大きい声ではっきり話す、できるだけアイコンタクトを取る、自分の言葉で聞き手に伝えようという気持ちで話す、など、プレゼンの注意点を簡単に説明した。

最終日の授業では冒頭に最終確認の時間を少し取ったあと、すぐに学生のプレゼンテーションに入った。プレゼンには話す方だけでなく、聴く方の態度も大切なので、テキスト以外のもの（各自の発表原稿など）はしまわせ、聴くことに集中するよう促した。各プレゼンのあとには教員からのフィードバック、授業の最後に（残り時間にもよるが）解説や授業の総括をし、学生にはこの 3 回の授業の感想を書いてもらった。早く書き終わっている学生には、口頭で一言ずつ感想を言ってもらった。

5.　学生の感想から読み解く成果（得られた能力実感、満足感、興味などの変化・発展）

このセクションでは、1 回目の授業（詩を読み終わった後）と 3 回目の授業（小説に関するプレゼンを終え、世界文学の授業内容がすべて終わった時点）で学生に書いてもらったコメントの抜粋を中心に、学生が教養教育科目の一環として文学（特にアメリカ文学）を学んだことで得られた成果と今後の課題を探っていく。担当した全てのクラスで書いてもらったため、これまで 700 名近くのコメントがあり、驚いたことに毎回ほとんどの学生が A5 サイズの用紙いっぱいに書いてくれたため、以下に挙げるのはほんの一部でしかない。コメントの中には学生の専攻による特徴が出ているケースもあるので、学科も合わせて記す（学部は省略）。明らかな誤字脱字以外はそのままの表現にしてある。全て載せると数十ページになってしまうため、ここでは特に似た意見が多かったものや、特徴的な意見をごく一部紹介しつつ成果を見ていく。

5.1.　学べたこと（感じられた成果・変化）

5.1.1.　読書習慣・興味（まとまった量のテキストを読んだ満足感・自信）

「今回の講義はとても刺激になった。自発的に図書館へ行って青い眼がほしいという本を借りた自分に驚き、これがきっかけで少し本を読むようになれればよいと感じた。」（人間科学科　T.A.）

「この授業を通して世界文学への興味が湧いた。夏休み、何作品か読んでみようと思う。もっと世界文学に触れてみたい !!」（児童教育学科　F.I.）

インターネットの情報検索は便利なものだが、学生のほとんどがスマートフォンを持っている時代、何もかもネット、しかも誰かがかいつまんで短くまとめたものを見て「わかった気」になってしまう学生が多い（自戒を込めて、社会人もだが）。そんな中、「本」という面倒で時間のかかるものに向き合い、その魅力に気づいてくれたことは教員として大変嬉しく思うと同時に、学生の今後の学びにとってもプラスとなるだろう。

5.1.2.　英語や詩への興味

「私は普段英語はとても好きですが、日本語の詩ですらあまり読まないのでとても新鮮でした。ですが、英語なので解読したいというやる気が出て読むのがとても楽しかったです。」（グローバルコミュニケーション学科　Y.S.）

「初めて英語で詩を読んでみて、表現の仕方やリズムがすごく美しいと思った。」（看護学科　O.A.）

「私は英語の詩を読んだのがはじめてだったので、単語から感情を読みとるのに少し時間がかかりました。（中略）英語の詩を読み、そこから色々なことを想像するのは難しかったけど、良い勉強になりました。」（経済学科　T.Y.）

「英語の詩は日本の詩とは違って独特のリズムがあったり、独特の感性があって面白いなと思いました。僕自身、英語は好きなので詩を英語で読むのはとても新鮮だったし、とても興味がわきました。」（人間科学科　T.M.）

「外国語のものを日本語に訳すとぼやけがちな表現もある中で、この詩は英語で感じる美しさもあり、かつ日本語でうかびあがってくる言葉の鮮やかさも感じられて、大変すごい詩だと思った。」（日本文学文化学科　S.H.）

「まとまりごとに韻をふんでると思いました。例えば、trill still hill など。聴いててすっと入ってくる心地よさがありました。」（日本語コミュニケーション学科　N.Y.）

「1 番伝えたい部分は 2 回言うとか、日本の詩と通ずるところがあるのはおもしろいなと思った。内容は、少し暗い内容だとは感じたが、その中からもマヤの自由への憧れがすごく伝わってきた。」（看護学科　M.Y.）

「国が違っても詩で韻を踏むことは一緒だということがおもしろかったです。詩は小説などと違って少ない文字で表現しなければいけなく難しいですが、詩をみる人それぞれにいろいろな姿を見せてくれる、おもしろく、すばらしいものだと思いました。」（法律学科　I.M.）

日本語の詩と英語の詩には共通するものがあると感じた学生もいる一方、日本語の詩との違いを感じた学生もいたことがわかった。また英語習得のためではなく、今まで学んできた英語を「使って」文学作品・人の人生に触れられた喜びを感じた者も多かったようである。脚韻など、詩の音やリズムといった側面に気づいて楽しんだ学生もいた。

5.1.3.　テキストに向き合い深く読む力、考える力、洞察力、分析力

「内容が非常に重く暗い話であるが故に時々難しく感じることもありましたが、自分自身の理解力と洞察力が高まったと思うので、非常に有意義な授業でした。」（経営学科　I.S.）

「難しいものから何かを発見する面白さを感じることができてよかったです。」（人間科学科　H.M.）

「3 回の授業を通した今、教育学部の自分でも必要な要素が盛り込まれていることに気付かされた。園児に読み聞かせをするような絵本でも深く読んでいくことはできる。もしかしたら子供の方が柔軟な考えをして質問をしてくるかもしれない。知識や考え方の幅を広げるためにももっと本を読むべきだと思った。」（児童教育学科　I.Y.）

テキストにじっくり向き合い、何度も読むことで、最初は素通りしていた言葉や表現に気づき、文学をより深く味わい、解釈することができる。学生には、「文学では決して解釈における正解は示されず、ゲームの攻略本のようにすべて種明かしする作者はいない。なぜなら作者がこの表現方法（自分の思いをそのまま綴ったエッセイなどではなく小説や詩という形態）を選んだのには理由があるはずだから」と伝えている。作者の意図は直接的に書かれていないので何度も読まないと見えてこない。しかし、想像力と洞察力をはたらかせながら繰り返し注意深く読むことで意味や解釈が浮かび上がってきたとき、新しい知と感情の世界に出会うことができる。文学作品（しかも簡単には理解できないもの）を読むことで得られた思考力や分析力は、人生のほかの場面でも役立つに違いない。

5.1.4.　一人で読むだけではなく一緒に読み、話し合うことで得られたもの

「世界の小説をあまり読んだことがなかったので読むのが難しかった。しかし、こころに響く部分があり、興味をひかれた。（中略）1 人で読むと感じたり考えたりすることは少ないけれど、グループ活動で他の人の意見を聞くことで新しい発見がたくさんあっ

た。」（建築デザイン学科　T.N.）

「正直、私は今まで文学系に強いと思っていたのだが、その自信が消えた。というのも、違った学部、違った出身が大きい。見方が変わり、意見をたたかわせる。久しぶりの国語の授業を楽しめた。」（日本文学文化学科　N.D.）

「最初の頃は文を読むことが嫌でやりたくないと思ったけれど、みんなで考えたことを共有していくうちに、内容も理解できてきて、今日プレゼンテーションを終えて、とても充実していたと感じる。」（経営学科　M.K.）

「深く読み込むことで、ときには飛躍した考察も生まれることもあって、それは違うんじゃないか、どの部分からそう考えたのか、などのある種の衝突からより考えが深まることもあり、1 人でよむことと、数人で読むことの違いがわかった。」（日本文学文化学科　K.H.）

「世界文学の授業を受けて、プレゼンをやってみて、ひとりで考えるよりみんなで考えたことは、難しく、そして面白くもありました。他の人の視点や解釈を聞いてみて、自分が考えなかったことやさまざまな方向からみる視点が増えたように思いました。（中略）本、読みものとして終わるのではなく、文学、本からの学びを感じられてとてもよかったです。」（法律学科　M.K.）

一人で読んで完結するのであれば、たんなる個々の読書で良いのだが、「皆で同じものを読み、周りと意見を交換し、まとめ、発表することで、一人で読むだけでは得られないものを得られた」という感想に、授業で文学を扱う意義を学生から教えてもらった気がした。またプレゼンというゴールを設定することで、より能動的にテキストと関わり、学生同士互いに刺激し合いながら解釈を深めていくことができることが確認できた。

5.1.5.　表現方法としての文学

「はじめて詩を読んだが、このような表現方法もあったのかと気づかされた。」（経営学科　K.T.）

「人種差別について主に学んでいく中で、インターネットや歴史本を読んで調べることとは違い、当時を経験した人の意見や考えを物語を通して自分なりの見方で解釈していけるということがおもしろかったです。ただ伝えたいことを直接書くより、ストーリーを組み立てて書くことで伝わりやすいこともあるのだと思いました。」（建築デザイン学科　K.R.）

「私は、3 回の世界文学を通じて、人が何かを主張する時に、文学を通じて主張するの

も有効な手だと感じました。」（グローバルコミュニケーション学科　N.Y.）

学生自身が困難や苦しみに直面したとき、また主張したいことがあるとき、そのまま直接的な言葉で吐き出すだけでなく、詩や小説といった別の形で表現し、自己を癒したり、世界に訴えたりしていくことが可能である。この表現手段への気づきはほかの分野の勉強では得られないものかもしれない。

5.1.6.　文学だからこそ、アメリカ文学（世界文学）だからこそ学べたこと

「はじめは内容もよくわからないものだと思っていましたが、読んでいくうちに本の世界観に吸い込まれ楽しいと思うようになりました。この経験を生かし、興味のあるないに関わらず、取り組む姿勢を大切にしていきたいと思いました。たいへん面白い授業でした。」（環境システム学科　O.T.）

「文学というものに触れようと自身が積極的に動くことはなかったので、この機会に新しい読み方を発見できた気がします。この文章から、やっぱり差別意識というのは誰しももっているものではあると感じましたが、それが形として現れない社会を築いていくことは出来ないのかなと考えました。最初は読みにくく、入りこみにくかったけれど、その壁を越えると面白くなってきて、たくさんの学べることがあって読めて良かったなと思います。」（社会福祉学科　Y.A.）

「今回の青い眼がほしいに対してのグループワークを通じて、1つの小説にもいろいろな人の価値観が現れていて非常に興味深かったです。人種差別は白人から黒人へのものというステレオタイプがあったけど、黒人から黒人への差別もあると知り、人種差別は単純な問題ではないと感じました。（中略）日本人として人種差別というものに実感がなかったけど、この本を通じて学べてよかったです。」（法律学科　T.Y.）

「人種差別や経済格差は日本でも、また世界でも問題になっているが、どこか他人事のような、自分とは遠いことなのでは、と考えてしまうことも多かった。しかしこの本を読んですぐ傍にこの世界が広がっていたら、と思うと信じられない気持ちが大きかったし、改めて人種差別の恐ろしさを学んだ。」（看護学科　N.M.）

「世界文学は物語の背景が日本のものとは異なることが多いので、新しい世界を知ることができ、自分への見解を深めることができると思います。」（建築デザイン　I.S.）

差別や格差といったものは、歴史学や社会学といったほかの学問分野でも扱われるものであるが、事実やデータで客観的に見るのとは少し異なり、物語の世界にどっぷりと浸かって、人生を翻弄される登場人物や語り手に感情移入しながらそれらの問題に触れることで、

問題をより主観的に、緊急性をもって捉えることができたり、外から理解しようとしたときには気づかなかったことに気づき、ある意味よりリアルに感じられたりするということがわかった。文学と呼ばれるものの中にはフィクション作品が多く、また現実社会ですぐに役立つ知識やスキルといったものにも繋がりにくいため、現代の大学生がそこに面白さや妥当性を見出せるのか、学びを感じてもらうことができるかというのが一番の不安要素だったが、学生のコメントを見るとそこは大いに果たされたようで、ほっとしたと同時に文学のさらなる可能性を感じた。

5.1.7.　人生について、自分についての気づき

「アンジェローさんは、つらい過去をもち、それでも詩人として強く生きていてすごいと思った。とらわれた鳥の気持ちがわかるということは、虐待や差別などで自由をうしなう辛さがわかるのだと思った。だから、優しく、力強くその人たちの立場を主張する人だと思った。私は今、自由な身だと思うので、他の人を思いやり、自由を謳歌したい。」（児童教育学科　K.R.）

「虐待や家族内での殺人など周りに言いづらいことなのに、それを誰でも読めるような詩に表現し、世界に発信することで、同じような思いや境遇を抱える人に寄りそい支えになっていると思いました。」（社会福祉学科　A.M.）

「今回は物語を通して自己と向き合ったかもしれない。」（日本文学文化学科　U.H.）

「今回の世界文学で取り扱った作品が、性差別についても少し考えることのできるものであったと思うのですが、自分は大学で性差別に関する心理学を学びたいと思って大学に入学したので、大変興味深く考えることができ、とても意欲的に取り組むことができました。」（人間科学科　N.R.）

「今では『差別を無くそうとする運動』があるけれど、実際に差別は意識していないところに多いと思いました。（中略）誰かに相談できたり、自分を認めてくれる人がいることがどれだけ大切かわかりました。自分の価値に気づける環境を大切にしていきたいです。」（看護学科　S.I.）

どんなに能力があっても、世界の広さや自分の価値に気づけないと、われわれの住むこの過酷な現代社会では自分を壊してしまうことにも繋がりかねない。実際、未来ある若者でさえも心を病んだり自ら命を絶ってしまうという痛ましいニュースを日々目にする。また自分の価値に気づけないということは他人の価値にも気づけない可能性があり、それによって他者を傷つけ、追い込んでしまうことにもなりかねない。自分の価値や幸せ、また他人への思いやりや想像力といったものが、これから生きていくなかである意味最大の「スキル」では

ないだろうか。たった3回の授業ではあるが、学生がその生きるスキルを習得する助けに少しでもなれたのであれば、文学という授業の意義はあったといってよいだろう。

5.2.　課題・考えるべき点

5.2.1.　内容が難しい

この授業では、自分で手に取るような、また簡単に理解できるようなものではなく、難しいけれど興味深いもの、何より重要なテーマを扱っていて表現としても優れておりぜひとも学生に紹介したいと筆者が考える作品を扱ったが、最終的にはポジティブが感想を書いていた学生でも「とても難しかった」「最初は難しく感じた」といったコメントを書いていたものは多かった。「最初は難しく感じられたからこそ学べるものが大きかった」「達成感があった」といった声が圧倒的に多かった一方で、教養教育として扱うには、作品としてもタスク（自分たちなりの分析・解釈をプレゼンすること）としてもややハードルが高かったのだろうか、という疑問はある。

5.2.2.　翻訳だから読みにくい、失われるものがある

今回扱った小説は原書でも難しいものなので、翻訳だからわかりにくいのかどうかは微妙なところではあるが、もう少し読みやすいものを選べば翻訳版もよりわかりやすい可能性はある。ただ、前項のとおり、難しいからこその達成感というものもある。また一人の日本文学文化学科の学生から「翻訳によって失われるものがあるのでは」といった意見があった。良い意味で日本文学専攻らしい反応といえる。筆者が学生に伝えたことは、「確かにそれはあり得るので、ぜひ原文で読むことに挑戦してみてほしい」ということと、「世の中の情報（特に海外の情報）はそのほとんどが誰かのフィルターを通しており、自分でしっかり判断する目を養わなければならない一方で、直接情報だけでは得られるものに限りがあるため、誰かのフィルターを通すことはある意味避けられないことでもある。フィルターを通すことで失われるものがあるとしても、そういった情報や作品に触れることには価値がある」というものだ。

5.2.3.　抜粋なのでわかりにくい

これは確かにそうかもしれない。作品を十分に楽しむ、理解するという点でも、本当は作品全体を読み通してほしいという願いはある。しかしそれでも、学生の反応を見れば、抜粋であってもこの作品を取り上げたことに意味があったことを確認できる。授業では、「もちろん全文読めばもっとわかることがあるし深く味わうことができて面白いので、興味を持ったらぜひ図書館で借りたり、手頃な値段の文庫版もあるので手に入れて全文を読んでみてほしい」と伝え、実際に全文読んだ学生、また夏休みなどに読みたいとコメントした学生も複数いた。授業で全文読むことができ、1回ごとに完結する短編小説を扱うことも検討したが、今回は科目運営サイドから「トニ・モリスンをぜひ」という声もあり、挑戦した。これはこれで良かったのではないかと思っている。

6. まとめ

さまざまな疑問とともに始まった教養教育科目としての世界文学の担当であったが、1年半を終えて、もちろん扱う内容や授業の運営方法にまだ改善の余地があるとはいえ、当初の不安や疑問は学生からのフィードバックによりかなり解消され、筆者自身、文学、そしてアメリカ文学の重要性と妥当性を再確認することができ、大いに勇気づけられた。文学ができることはまだほかにもあるかもしれないので、引き続きその可能性を探っていくとともに、重要な文学作品の発掘、またその魅力的な伝え方について探っていきたい。

註

1） 武蔵野大学ホームページ「武蔵野BASIS」https://www.musashino-u.ac.jp/academics/basic/basis.html（2017年10月8日閲覧）

2） 経済産業省ホームページ「『社会人基礎力』とは」http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_image.pdf

3） 経済産業省ホームページ「能力の全体像」http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/aboutNouryokunozentaizou.pdf

4） 経済産業省ホームページ「平成25年度産業経済研究委託事業『社会人基礎力育成の好事例の普及に関する調査』報告書」http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/25fy_chosa/Kiso_30sen_houkokusyo.pdf

5） 文部科学省ホームページ「平成24年3月26日中央教育審議会大学分科会大学教育部会『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』（審議まとめ）」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/__icsFiles/afieldfile/2012/03/28/1319067_1.pdf ページ1

6） 文部科学省ホームページ「平成27年8月26日『教育課程企画特別部会　論点整理』」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf

7） Angelou, Maya. “The Caged Bird.” *Shaker, Why Don’t You Sing?* Penguin Random House, 1983.

8） トニ・モリスン著、大社淑子訳『青い眼がほしい』早川書房、1994年

9） Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. Vintage Books, 1970.